

愛人物語

aijin-monogatari

笹沢左保



文春文庫



文春文庫

238—8

愛 人 物 語

定価はカバーに
表示してあります

1983年7月25日 第1刷

著 者 笹沢左保

発行者 西永達夫

発行所 株式会社文藝春秋

東京都千代田区紀尾井町3—23 千102

TEL 03・265・1211

落丁、乱丁本は、お手数ですが、小社営業部宛お送り下さい。送料小社負担でお取替致します

印刷・凸版印刷 製本・加藤製本

Printed in Japan
ISBN4-16-723808-X

文 春 文 庫

愛 人 物 語

目次

絹子／支配された味	7
ミナ／骨 こつ の行方 ゆくえ	39
トモ子／逃げた結婚	71
夕子／角度のない坂道	103
マコ／不明夫妻	153
里美／午後の意地	185
真弓／一生のお願い	217
正代／怒りの祝福	251

愛人物語

絹

子——支配された味

1

遠くで、電話のベルが鳴っている。

目を覚まして、相川は時計を見た。午前一時を、十分ほどすぎている。相川は、起き上がった。悪夢の続きを見ているようで、暗澹たる気持ちにさせられる。目をこすりながら、相川はベッドをおりた。

「わたし、出ましようか」

隣りのベッドから、妻の阿衣子の声が言った。当然のことだが、阿衣子も電話のベルで目を覚ましたのである。

「いや……」

相川は急いで、寝室を出た。

どういう電話か、相川にはわかっていたのだ。見当がついたのではなく、予測できたのである。

電話に阿衣子が出たら、大変なことになる。妻は愕然^{がくぜん}となったあと、半狂乱になるかもしれない。廊下を歩く。冬でもないのに、足の裏にゾクッとするような冷たさを感じた。階段をおりた。電話のベルが、急に大きくなった。だが、階下は静かである。子ども部屋では、長女と長男が眠っている。

奥の座敷には、相川の両親がいた。両親は揃って、耳が遠くなりかけている。それに年寄りも、朝は早くても夜中には熟睡している。子どもたちと同様、電話のベルで目を覚ますようなことはなかった。

電話機は、玄関にある。電気をつけてから、相川は送受器を取り上げた。家の中が、静かになった。相川は階段のほうを向いて、送受器を耳に宛^{あて}がった。妻が階段をおりてくれば、すぐに気づくという警戒態勢だった。

「もしもし……」

相川は最初から、声をひそめていた。

「相川吾郎さん、おいでですか」

男の声が、いきなりそう言った。真夜中に電話をかけて来ておいて、ひどく横柄な感じであった。

「わたしですが……」

相川は相手の男について、警官ではないかという判断を下していた。

「こちらは、世田谷の玉川救急病院ですが、五十嵐絹子という人をご存じですね」

男は警官ではなく、救急病院の人間であった。当直の医師かもしれない。

「知っております」

「その五十嵐絹子さんが一時間ほど前に、救急車で送られて来ましてね。自殺未遂です。いま、手当てを終えたところなんですが……」

「未遂なんですね」

「命には、別条ありません。カミソリで、左手首を切りましてね。六針ほど縫いましたが、まあ心配はいらないでしょう」

「そうですか」

「連絡先を訊いたところ、家族は岡山県に住んでいて、東京には親戚の人もないというので……」

「それは、事実なんですがね」

「それで、保護者代わりの相川吾郎さんに連絡してくれというのでお電話をしたんです」

「どうも、お世話さまです」

「じゃあ、どうぞ……」

そう言つて、医師らしい男は一方的に電話を切った。

いまからすぐ病院へくるようにと、強制はされなかった。それは当然、相川が駆けつけてくるものと、決め込んでいるからである。そうでなければ、午前一時すぎに電話をして来たりはしないだろう。

それに医師らしい男は最後に、どうぞ、と付け加えている。どうぞ、おいで下さい、という意味なのだ。何が何でも入院した者を優先せよ、という人道主義が現代の常識なのである。

いずれにしても、これから世田谷区内の病院へ行かなければならない。相川の家は文京区の駒込五丁目にあるので、世田谷の玉川まではかなりの距離であつた。この時間に出かける口実も、

必要である。

暗澹たる気持ちだが、一段と重くなっていた。なぜ予感的中するのかと、腹立たしくなる。これが夢の中の出来事だったらと、三十八歳の男が少年みたいな期待にすがりつきたくないのであった。

五十嵐絹子は病院で、相川に連絡するようにと、はっきり指名したのだ。相川のことを、保護者代わりだと言ったらしい。もちろん病院の医師に、相川の自宅の電話番号を教えたのも五十嵐絹子である。

東京に親戚もない、というのは事実であった。しかし、仮りに親戚があったとしても、五十嵐絹子は病院で相川の名前を持ち出したことだろう。相川が保護者代わりだと、明言したのに違いない。

五十嵐絹子は、急報を相川の耳に入れたくて、自殺を図ったことになる。したがって、その知らせが真っ先に相川のところへ届かなければ意味がないのだ。相川を保護者代わりということにしてしまうのも、そのためであった。

相川は、今日の午後四時にかかった電話でのやりとりを、思い出していた。電話といっても、総務課にいる五十嵐絹子から秘書課長の席にかかった内線電話で、別に珍しいことではなかった。

「今夜、いいでしょう」

「いや、まずい」

「だって、明日は土曜日よ」

「だから、まずいんだ」

「どうしてなのよ。土、日って、お休みじゃないの。今夜だけでもいいから、泊まって欲しい

わ」

「明日の朝、早いんだ」

「何があるの」

「ゴルフさ」

「社長のお供ね」

「決まっているだろう」

「誰かに、代わってもらってよ」

「そうは、いかないよ。いつもみたいに、社長のご指名なんだ」

「秘書課長って、社長のゴルフに付き合うのが仕事なの」

「そう思いたければ、それでもいいさ」

「ねえ、お願い。今夜、泊まって……」

「聞き分けのないことを、言ってくれるなよ」

「いやよ、絶対にいや。誰かに明日のことは代わってもらって、今夜は来てくれなくちゃい
よ」

「三日前だって、無理して泊まったじゃないか」

「駄目、そんなの……」

「きみの言うとおりにならないのは、よほどのことがあるときだけだろう。その点を、よく理解
してもらいたいね」

「わたし今夜、待っていますからね」

「いいかげんにしてくれよ。おれを困らせたって、意味がないじゃないか」

「どうしても、駄目だっていうの」

「とにかく、今夜はまずいよ」

「そう、そうなの。わかったわ、いいわよ。じゃあね」

電話を切る直前に、五十嵐絹子は声と口調を一変させていた。それが、こっちにも覚悟がある、という通告に感じられた。

絹子のことだから何かやるのではないか、という不安が相川にはあった。しかし、いくら何でもそうそう同じことは繰り返さないだろうと、自分を慰めるための樂觀もなくはなかったのだ。

ついさっき電話のベルで目を覚ましたとき、絹子がどうにかしたという連絡だと直感したのも、実はそのためだったのである。やはり絹子は、彼女なりの報復措置をとったのだった。

二週間ほど前にも、五十嵐絹子は無謀なことをやってのけた。友人の車を借りて、睡眠薬を飲んでうえて、高速道路を飛ばしたのである。さいわい、そのときは事故にも結びつかなかったし、警官にも見つからずにすんだ。

だが、あとになって絹子から、その話を聞かされたとき、相川は背筋に寒気を覚えた。助手席には遺書と、連絡先として相川の住所と電話番号をメモした紙が、置いてあったのである。途中で気が変わったというから、単なる脅しかもしれない。しかし、もし本気でやったとしたら、凄まじい事故を引き起こす可能性があったのだ。関係のない者を何人か道連れにしての凄絶な自殺、ということになったらと思うと、相川はゾッとしないではいられなかった。

そのときも、絹子の求めに相川が応じられなかったということが原因だった。絹子は自分の二十三回目の誕生日を記念して、一泊旅行に連れて行ってくれと言いつ出したのである。

だが、相川はそれに、応ずることができなかった。長男が、四十度を越える熱で、苦しんでい

たのだ。あるいは、入院することになるかもしれない。そうになると、一泊旅行の口実も設けようがなかった。

それで相川は、一泊旅行は先に延ばそうと提案した。そのことが、五十嵐絹子には気に入らなかったのである。わたしのことなんてどうでもいいのねと、絹子は乱暴に電話を切った。

その翌日に絹子は、睡眠薬を飲んで友人の車を運転したのであった。それからまだ、二週間しか過ぎていない。それで相川はいまの電話で、横柄な感じの男の声を聞いたとき、警察だと判断したのである。

五十嵐絹子がまた車を運転して、警察沙汰になるような行動をとったのではないかと、相川は思ったのであった。

2

こういう場合に、秘書課長というポストは便利だった。社長、重役、あるいは会社自体に突発事故が起こったとき、秘書課長のところへ呼び出しがかかったということにしても、疑われずにすむからであった。

大手の企業でないと、なおさら秘書課長なる役職の責任範囲、実務の内容、役目といったものが曖昧に感じられる。社員でないと正確にはわからないし、部外者は勝手に決め込んでしまうものだった。

妻の阿衣子なども、秘書課長と社長秘書を完全に混同している。そのために、夜中であろうと会社から非常呼集がかかったと言え、阿衣子は頭から本気にする。帰宅時間の遅れや、外泊に